

## 表参道日記 167

## 嘘つきは泥棒の始まり

文  
伊藤公一  
text by Kouichi Ito

自由民主党の政治資金問題が解明しないまま、大物・二階俊博元幹事長の次期選挙への不出馬宣言。110年ぶりの新入幕優勝を果たした尊富士。お笑い界のキングメーカー、松本人志が自身の性加害問題を報じられた文芸春秋社を提訴し口頭弁論。安全性が信じられていたサプリメントの中、大手の小林製薬が販売する紅麴の成分を含む製品による健康被害など…：年度の切り替わり時期の様々な話題を完全に凌駕したのは、我が国のヒーロー、ロサンゼルス・ドジャースに移籍したばかりの大谷翔平選手の専属通訳として、お馴染みの水原一平氏の違法賭博関与報道である。

テレビ露出度は高く、大谷選手の生活そのものを支えていたと評価されていた縁の下での力持ちでも、当然のことながら、瞬時に球団から解雇されたわけだ。

そこで事件の詳細は割愛するが、脱稿時は水原氏の一転する説明内容から様々な憶測が流れ、大谷翔平選手自身が「全く知らなかった」という主旨の会見を行ったところである。

やがて真実が明らかになるであろうが、円安とはいえ、6億8千万円の大金がオンラインで自身の銀行口座から賭博の胴元に振り込まれていたことに

全く気付かなかったというのは大物過ぎるし、鈍感過ぎると思う。

野球少年が、そのまま大きくなったと称される飾らない男が、いかにも清楚な女性と結婚し、益々、人物像が評価されたタイミンクに、その報道に触れ、正直、10年目の社会人としては如何なものかとも感じる。

1000億円の報酬の中、それは微々たるものかもしれないが、その金額は普通の人間が普通の仕事を普通に定年まで続けた上で受け取り得る3人分ぐらいの生涯賃金である。

そして日米で、この事件に対する解釈が違うのも当然であろう。

日本における「大谷君が可哀そう」という性善説は、多民族国家である米国においてもマジョリティーにはならない気もする。

仮に大相撲の世界で、モンゴル力士が通訳を介して、インタビュウに込んでいる場面を想像しよう。

たとえ横綱にまで昇りつめたとしても、外国人力士の活躍を心から歓迎出来ない日本人が多数存在するわけだ。

言葉が通じない惨めさと通訳の有難みは、アメリカで2年間暮らした身から大いに理解は出来るが、95年に海を渡って日本人のメジャーリーグ入りの先鞭を切った野茂英雄投手は水原一平

氏のような、お世話役は連れて行かなかったように記憶している。

政治不信も性加害問題も、誰かが嘘をついているのであるろうが、水原一平氏が「本物の嘘つきで泥棒」であったのであれば、通訳の仕事そのものが信用できないことであろう。

英語学習も  
頑張れ！大谷  
翔平！

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。  
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。  
東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。  
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。  
伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/>  
名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）<http://www.kojin-kai.jp/nagoya/>  
さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）<http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

